

令和 7 年 6 月 11 日現在

機関番号：17104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2022～2024

課題番号：22K02685

研究課題名(和文) グローバルな「学びの場」の創造：多様性を支える国際共修モデルの開発

研究課題名(英文) Global Learning Place Co-Construction: Developing an International Collaborative Learning Model that Supports Diversity

研究代表者

加藤 鈴子 (Kato, Reiko)

九州工業大学・教養教育院・教授

研究者番号：30633151

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：アンケート調査から研究対象大学において国際教育プログラムへの参加を躊躇する要因には、学生自身が「語学が苦手な理工系学生」等のステレオタイプを演じることによるもの、「国際教育(グローバル)」と「学士課程教育(エンジニア)」の二項対立が存在する環境で、特にGPAに不安がある学生にとっては国際教育はリスクと捉えられている、ということが挙げられた。一方で、国際共修プログラムに参加した学生への聞き取り調査からは、国際共修の「場」を構築するのにさまざまなツールは表面的な活動においては有効だが、深層的な成果を感じるには、ツールでは解決できない、人間のコミュニケーション能力が必要となることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ポジショニング理論を用いた学生の意味決定分析は、学生自身が抱くステレオタイプや、教育制度の構造的問題が、国際教育における参加格差を引き起こす可能性を示唆しており、多様な学生が国際教育にアクセスできるようにするための組織的変革の必要性を示している。学びの場を構築する要因の分析からはICTツールが学習環境の構築には有効である一方で、学習成果に対する満足感の獲得には、人間同士のコミュニケーション能力が不可欠であることが示されており、対人コミュニケーション能力や異文化理解の育成が国際的な学習環境において必要であることを示唆している。これらの結果は新たな教育モデルの開発に貢献するものである。

研究成果の概要(英文)：The analysis of the survey, using positioning theory, revealed that the reasons for students' hesitancy to participate in international education programs at the universities under the study were: (1) students themselves internalizing the stereotype that "STEM students are not good at languages," and (2) the perception that, in an environment where a dichotomy exists between "international education (global)" and "bachelor's education (engineering)," international education poses a risk, particularly for students concerned about their GPA.

On the other hand, the analysis of interview data with students who participated in the international collaborative learning program suggested that, while various ICT tools are effective in constructing a learning place on the surface, genuine satisfaction with learning outcomes requires human communication skills, which cannot be replaced by tools.

研究分野：言語文化教育

キーワード：国際共修 トランスランゲージング ポジショニング

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) グローバル化が加速的に進展する中、21世紀社会型スキルやキー・コンピテンシーといった概念が教育の分野で盛んに用いられるようになり(松尾 2015 など)、従来の知識・技術の獲得に加えて、柔軟で高度な思考力・判断力や多様性を受容する態度の養成が、教育目標に掲げられるようになった。2018年にはOECDによりグローバル・コンピテンス(OECD定義: 国際的な課題に関する理解や文化的多様性・寛容性に対する態度)のフレームワークが明確にされ、教育現場ではグローバル・コンピテンスを涵養するための海外留学や国際共修など様々な異文化間学習が増強されてきた。

(2) 経験学習が効果的とされる異文化間学習では、従来移動を伴う交流・体験が主流であるが、2020年に発生した新型コロナウイルス感染症の影響拡大により海外渡航が制限され、ICT技術を活用したオンライン国際共修(Collaborative Online International Learning: COIL型)プログラムが増加した。国際共修を指導してきた教師の中には「実際に現地を訪れたり、海外の学生と直接会って交流したりすることには変えがたい」というような意見を持つものも存在するが、COIL型教育への移行は、感染症対策としての一時的な代替措置に留まらず、今後も活用が進むことが予測される。なぜなら、これまで経済的、文化的等、様々な理由から海外研修の機会にアクセスできなかった学生にも国際共修の機会を提供することを可能とし、異文化間学習の実施形態の多様化と捉えることができるからである。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的はオンライン活動を含む国際共修プログラムを「学びの場(Learning Place)」の構築という視点から探究しようというものである。従来の国際共修プログラムに関する研究では、具体的な実践方法や学習成果に焦点が充てられることが多い。例えばIDI(Intercultural Development Inventory)やBEVI(Beliefs, Events, and Values Inventory)など、学習成果の客観的測定・評価方法として様々な試みがなされているが、いずれも学習者個人の資質(信念や行動特性の変化)を学習成果として可視化しようとするものである。本研究では、国際共修という物理的あるいはバーチャルな場所(space)を、学習当事者たちがどのように「学びの場」に変容していくのか、そこで起こっている現象を明らかにし、以下について理解を深めることが目的である。

- (a) どのように「学びの場」が構築されるのか
- (b) どのような要素が「学びの場」の構築に必要なのか
- (c) 大学というローカルな場所がグローバルな「学びの場」として発展するためにどのように貢献できるのか

(2) 同時に、本研究は「グローバル・コンピテンスとは何か」という問いについて、従来の固定的な定義や個人の資質としての能力の理解の範疇から、実際にその力が発揮される場面での交渉・流動的なものとして捉える視点に発展させるものである。グローバル・コンピテンスを個人の能力としてのみ捉えることは、ある能力を有した者とそうでない者、あるいは海外に渡航できる者とできない者など、様々な二項対立を生み出す。全ての子どもに必要とされるグローバル・コンピテンスは新たな社会選別機能として利用されてしまう危険性ははらんでいるが、そうならないように個人の資質・能力に加えて、社会の発展と捉えることが重要である。本研究においては、柔軟な「学びの場」の構築という視点を取り入れることで従来の二項対立を捉え直し、社会的視座からグローバル・コンピテンスについて理解を深めることを目的とする。

3. 研究の方法

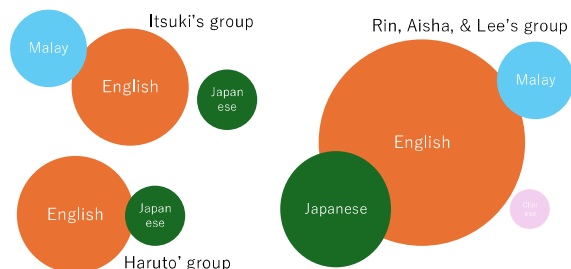
(1) 上記(a)および(b)を解明するにあたり、2022年~2023年に筆者が実施したオンライン活動を含む国際共修プログラムに参加した学生の中から調査協力者を求め、半構造的聞き取り調査を行った。プログラム参加者全員に対して調査協力を求めたが、調査への同意を得ることができたのは、日本のJ大学から6名、国際共修協働実施校であるマレーシアのM大学から2名の合計8名だった。聞き取り調査の質問項目は以下の通りである。

- 協働学習開始前に、相手の学生についてどのようなイメージを持っていましたか?
- そのイメージは協働学習を経て変化しましたか? 変化しませんでしたか? どのように?
- 協働学習のセッションで起こったことを最初から順を追って教えてください。
- 協働学習で難しかったことは何ですか? どのように解決しましたか?
- 協働学習が捗った要因はなんだと思いますか?
- 協働学習の経験を踏まえてグローバル・コンピテンシーとはどんなことだと思いますか?
- 文化背景の違う人と対話するには、言語以外に、何が必要だと思いますか?
- 協働学習を通して、(自分自身が)一番変わったと思うことは何ですか?
- 今後協働学習に参加する後輩にアドバイスするとしたら伝えたいことは何ですか?

インタビューは調査協力者の同意を得て録音し、後に詳細な分析のために文字化した。分析の第1段階として、文字化されたデータを繰り返し見直し、オープンコーディングによるカテゴリ化

言語に付与された価値観の差が明らかになった。日本とマレーシアの大学生による国際共修の場では、英語、日本語、マレー語がグループワークの際に使用されたことが明らかになったが、その使用頻度や使用に関する含意が異なっていた。学習者の共通言語である英語の使用がより頻繁で高い価値を持つことは明らかであるが、学習者の第一言語である日本語やマレー語の使用は、好ましくないものとして位置付けられていた。日本語に関しては、英語に苦手意識を持つJ大学の学生2名からは、グループメートに見えないように(隠れて)翻訳機能を使用している場面が語られる一方で、M大学の学生のデータからは「日本語を使用することを薦める発言をした」という描写も見られ、言語資源としての日本語の価値が大きく異なることがわかった。一方で、マレー語の使用は最低限に抑えられ、あるいはJ大学の学生にはあまり認知されておらず、日本語よりも低い価値付与がなされていることがわかった。

Languages of the space/place



(3) 言語と協働学習の関わり

また、協働学習への「失敗感」は自身の言語能力に関する自己評価と深く関わっていることも明らかになったが、ただ単に「英語ができない」から失敗しているわけではなく、英語使用場面のバリエーションが示された。本研究で聞き取り調査に協力したJ大学の学生6名のうち2名は英語に対する苦手意識を強く訴えていたが、実際には他の4名も含めて、全員が、翻訳ツールを使う、写真を見せる、自分の意見を記述する等、さまざまなICTツールを用いて、「言語の壁」を超え、積極的に意見を発信し、グループワークに貢献していた。しかし、英語に関する苦手意識を強く訴えた学生2名は、成果物(グループ発表)に対して満足しておらず、彼らはそれを「英語能力」が原因だったとしていた。しかし、データ分析からは、彼らの不満は、ディスカッションにおいて意見の「すり合わせ」がうまくいかなかった、あるいは歪であったと感じていることに起因しており、英語使用においてより高度なコミュニケーション能力との複合的な問題であったことが伺えた。つまり、国際共修の「場」を構築するのに様々なツールは表面的な活動あるいは開始時には有効だが、深層的な成果を感じるには、ツールでは解決できない、人間のコミュニケーション能力が必要となることが示唆されたと考えている。



<引用文献>

- フェアクロー・ノーマン(2008)『言語とパワー』大阪教育図書株式会社.
- Kayı-Aydar, H. (2019). Positioning theory in applied linguistics: research design & applications. Cham: Springer.
- Langenhove, L. V., & Harré, R. (1999). Positioning theory: Moral contexts of intentional action. Massachusetts: Blackwell.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 加藤 鈴子	4. 巻 10
2. 論文標題 工業系大学におけるカリキュラムの国際化とポジショニング 「グローバル」と「エンジニア」の狭間で	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Reiko Kato
2. 発表標題 Should it look like stacking Lego bricks or liquid-like fusion: negotiation of multilingual practices
3. 学会等名 AAAL 2025 Conference（国際学会）
4. 発表年 2025年

1. 発表者名 加藤 鈴子
2. 発表標題 国際共修をめぐるディスコースとポジショニング
3. 学会等名 異文化間教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 加藤鈴子
2. 発表標題 国際共修で構築される学びの「場所」：スペーシャル・レパトリーとしてのコンピテンスの模索
3. 学会等名 異文化間教育学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------